滋賀県教育委員会

【総人口】1,406,648人（令和５年５月１日現在）

【主担当部局】滋賀県教育委員会幼小中教育課
（公立幼稚園・小学校担当）

【主な関係部局】滋賀県健康医療福祉部子ども・青少年局
（保育所・認定こども園担当）
滋賀県総務部私学・県立大学振興課
（私立幼稚園担当）

【自治体 関連URL】http://www.pref.shiga.lg.jp/edu/school/kakusyu/youzi/

（令和５年５月１日現在）

	幼稚園			保育所		幼保連携型 地域裁量型		小学校		
	国立	公立	私立	公立	私立	公立	私立	国立	公立	私立
施設数	1	101	19	61	142	40	84	1	218	0
園児・児童数	110	6,779	1,632	5,679	12,809	6,136	11,395	621	78,368	0

事業実施地域・協力園校	【実施地域】 彦根市城東小学校区 【協力園校】 幼：公立幼稚園１園、公立保育所１園、私立保育所１園、私立幼保連携型認定こども園１園 小：公立小学校１校

架け橋期のカリキュラム開発会議	【会議委員人数】 ２５名	【開催数】 ３回
	【委員属性】 公立幼稚園長１名、公立保育所長１名、私立保育所主任１名、公立認定こども園長１名、公立小学校長・教頭２名、コーディネーター２名、小学校加配教員１名、小学校校内研究主任１名、小学校１年生担任１名、園５歳児担任４名、教職大学院教授１名、県公立幼稚園・小学校担当３名、県保育所・認定こども園担当２名、彦根市小学校担当者２名、彦根市幼児課２名	

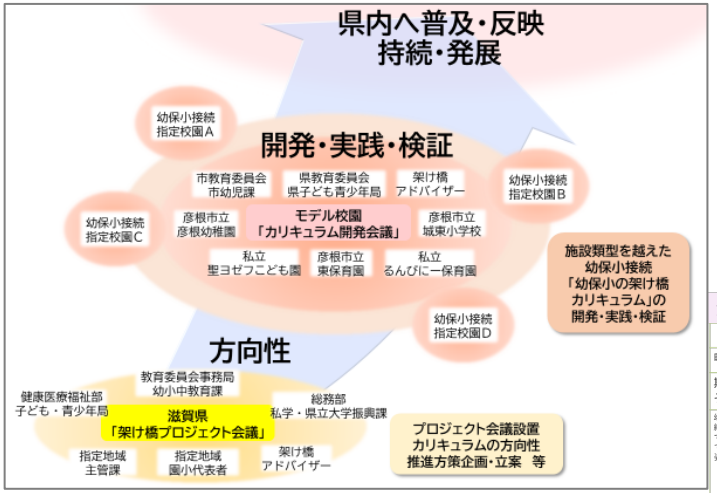
架け橋期のコーディネーター等	【配置人数】 ２名 【経歴】 ・元保育園長 ・元公立小学校教諭

架け橋期のカリキュラム	【開発主体】 城東小学校区地区（１公立幼稚園、１私立保育所、１公立保育所、私立幼保連携型認定こども園１園、１公立小学校） 県学びに向かう力推進事業指定校区：４校区

カリキュラム開発会議

視点	留意事項
架け橋期のカリキュラムに関する議論	・本県の幼保小接続の現状は、研究が終了すると継続しない、年度途中にカリキュラムを見直しにくいといった課題が見られ、取組が「点」に止まり「面」として広がりにくかった また、公立幼稚園と認定こども園・保育所、私立幼稚園の所管課が三つに分かれており、幼児教育センターの設置はなく、カリキュラムを開発するための会議等も実施していない。そこで、３課局で「プロジェクト会議」を立ち上げ、カリキュラムの方向性を示す滋賀県版「架け橋期のカリキュラム」枠を開発した。 ・滋賀県版「架け橋期のカリキュラム枠」は、５歳児から１年生の２年間とした。また、園と小学校が期待する子ども像を共有し、そこに向けての大切にしたいことを共通理解すること、そして、共通理解したことを実践し、振り返るという持続的・発展的な幼保小接続を支えていくものとした。 ・県が滋賀県版「架け橋期カリキュラム枠」を開発し、方向性を示すが、あくまでもその中身については、校区における「カリキュラム開発会議」において、校区の実態に応じたものを検討し、園と小学校が自分ごととして幼保小接続を進めることを大事にする。 ・架け橋期カリキュラム作成の手掛かりとなる「０歳～７歳までの10の姿における発達や学びのプロセス」や「０歳～７歳における『大切にしたいこと』の手掛かり例」を県で作成し、作成のプロセスを示した『学びをつなぐ幼保小架け橋ガイドブック「架け橋期のカリキュラムを作成しよう！」』を発行し、県内へ普及・啓発した。
会議設置による成果と課題	・研究１年目は、施設類型の違いもあり、互いの想いがなかなかすり合わなかったが、園と小学校が「架け橋期カリキュラム」作成を通して、共通の視点をもつことで互いの保育・教育の理解につながった。 ・研究１年目は、当初の予定より会議数が大幅に超えてしまうこととなり、校園の負担が大きかった。研究２年目は、カリキュラム開発会議を見通しをもち、検証・改善する場として機能させることとし、会議数を精選するとともに、会議のもち方を改善し、持続可能な幼保小接続の体制づくりを図った。

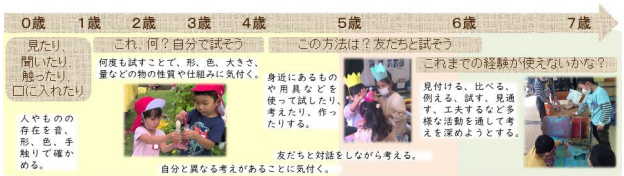
【幼保小の架け橋プログラム事業体制】



〇令和４年度成果物
『学びをつなぐ幼保小架け橋ガイドブック「架け橋期のカリキュラムを作成しよう！」』を発行、県内へ普及啓発

〇滋賀県版「架け橋期カリキュラム」共通シート
〇滋賀県版「架け橋期カリキュラム」実践記録
〇0歳～7歳までの１０の姿における発達や学びのプロセス等

校区「カリキュラム開発会議」にて内容を検討



滋賀県版「架け橋期カリキュラム」共通シート　【城東小学校区】校園名（　　）

		５歳児			第１学年		
時期		４・５・６・７	８・９・10・11・12	１・２・３	４・５・６・７	８・９・10・11・12	１・２・３
期待する子ども像		心が動く、心をほぐす ～答えがないことでも、自ら考え、しなやかな心をもち、失敗を恐れず行動する～					
幼児期の終わりまでに育ってほしい姿	自立心	やってみてできたことや、うまくできなくて困った経験を通して、もっとこうしたいという思いが強くなっていく。	考えたり工夫したり、失敗したりを繰り返しながら、自分なりに最後までやってみようとする。	できた満足感や達成感から更に積極的に自分の考えを出し、自信をもって諦めずに取り組むことができるようになる。	自分でできそうなことを見つけてためしたり、やり直したりしながら、新しい生活に慣れる。	経験したことをもとに見通しをもち、手ごたえを感じながら、できることを積み上げていく。	経験に基づいた見通しをたてて取り組み、達成感、満足感を味わい、自信を深める。
	思考力の芽生え	自分と友だちの思いや考えの違いに気付きながら色々な遊びや活動を楽しむ。	お互いの思いや考えを伝えたり聞いたりしながら、もっと楽しくしようと工夫するようになる。	グループやクラスで色々な考えを出し合い違いを受け入れて新しい考えを生み出そうとする。	新しい生活や環境に慣れ、小学校の学習や活動に興味をもつ。	お互いの考えの違いに気づいたり、よさを感じたりして、ともに学ぶことを楽しむ。	ひとりで考えたり、友だちと考え合ったりして、物事を解決する面白さを味わい続ける。
大切にしたいこと	環境・単元	子どもが手に取り、自らやってみたい、もっとこうしたいと思えるような場の工夫	自分で見て触れて感動できる豊かな体験の積み重ね	友だち同士の関わり（異年齢交流を含む）が活性化する場づくり	期待感いっぱいの学びの環境	広がる　つながる　学びの環境	経験・既習したことを試しながら深まる自信・意欲
	先生の関わり	好きな遊びに夢中になれる時間や場を充実させるような関わり	共感的な受け止めと関わり	個の思いを認め、つなげる	入学までの体験を把握し、触れたくなる、すぐ試したくなる材料・用具の配置	広がりつながりを生む　材料・用具の配置と教師の声掛け	グループやクラスで色々な考えを出し合い違いを受け入れて新しい考えを生み出す関わり
	キーワード	やってみたい、もっとやりたい	様々な経験の積み重ね	友だちとつながる、深まる	知ってる！　やりたい！	もっと　もっと　やりたい！	できたよ！もっとできるよ！
主な教育課程・予想される活動		各園・小学校において記入					
振り返り							

		５歳児
時期		９・10・11・12
期待する子ども像		
幼児期の終わりまでに育ってほしい姿	自立心	考えたり工夫したり、失敗したりを繰り返しながら、自分なりに最後までやってみようとする。
	思考力の芽生え	お互いの思いや考えを伝えたり聞いたりしながら、もっと楽しくしようと工夫するようになる。
幼児期の終わりまでに育ってほしい姿が見られた子どもの学びの姿		〇運動会 ・運動会の練習に向けて、自分で活動の服装や集合場所、時間を確認して行動することができた。 ・組体操の活動では、自分達でどのように取り組んでいきたいかということを、考えて話し合い、「そら」をテーマにすることとなった。「浮いている飛行機」「プロペラが回るヘリコプター」「きらきらひかる星」など、子どもたちから出てきた発想をみんなで共有し、それを具体的に手を広げたり腰をかがめたり回ったりする身体の動きで表現していった。 ・例えば、「プロペラが回るヘリ」では、回る回数や方向、速さなどについて、どうするのが良いか、子どもたちが考えを出し合った。最終的には６回右回りで回って、最後はガソリンが減るのでゆっくり、回って止まり、バッテリーがなくなることを示すのにジャンプしようということになった。このように本番まで子どもが考えを出し合い、動きを修正しながら完成につなげ、本番も生き生きとした表情で楽しみ、自信をもって表現することができた。
他園・小学校からのコメント		

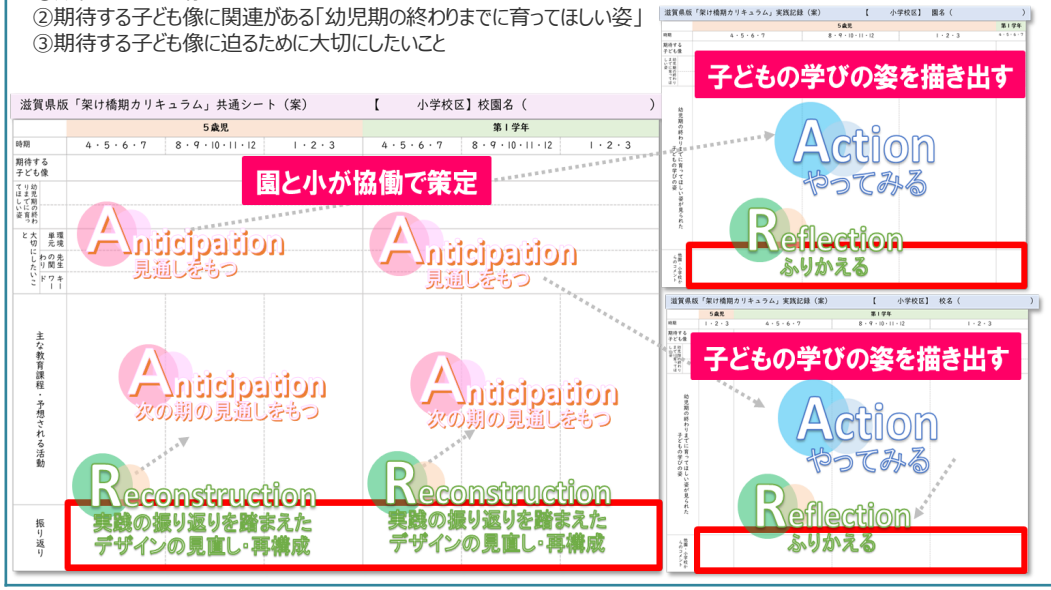
架け橋期のカリキュラム

視点	留意事項
開発プロセス	・滋賀県版「架け橋期カリキュラム」枠を活用し、モデル地区を中心に、校区の実態に応じて内容を検討した。 ・研究１年目は、互いの保育・教育の理解を深めたうえで、期待する子ども像を設定し、10の姿の中の自立心と思考力の芽生えを意識し、取組を推進することとした。 ・研究２年目は、昨年度作成したカリキュラムの見直しを図った。例えば、小学校が複数園と幼保小接続を進める場合、教育課程のつながりが見えにくいという課題を踏まえ、複数園の教育課程を一つにするという作業を行った。
架け橋期のカリキュラムの概要	【既存のカリキュラムの課題】 ①５歳後半から１年生４月～５月までのカリキュラムであり、児童が“学校に慣れる”ことを目指しており、「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」を踏まえてはいない。 ②書いてあることが細かすぎる、用語がわからない、園と小学校が別個で作成し、協働して策定できていない。 【滋賀県版「架け橋期カリキュラム枠」】 ・園と小学校が協働で作成する「共通シート」と「実践記録」の２枚のシートで構成。 ・「共通シート」には、大きく三つの視点を設けている。共通の視点は、①期待する子ども像、②期待する子ども像に関連がある「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」、③期待する子ども像に迫るために大切にしたいこと。 ・園と小学校が共通の視点を理解したうえで、互いに実践し、「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」が見られた子どもの学びの姿を「実践記録」に描き出す。 ・「共通シート」には、実践を振り返るための「振り返り枠」を設けている。また、「実践記録」には、他園や小学校からのコメントを記載する「コメント枠」や「振り返り枠」（※下図赤囲み）を設けており、実践を振り返ったり、カリキュラムを改善したりするＡＡＲサイクル（※）を生み出すことを意図している。 ※　ＡＡＲサイクル（Anticipation：見通しをもつ、Action：やってみる、Reflection、Reconstruction：実践の振り返りを踏まえたデザインの見直し・再構成）

【　滋賀県版「架け橋期カリキュラム」枠　】

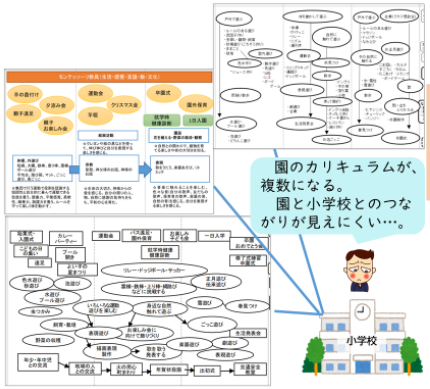
「共通シート」
三つの視点を園と小学校が協働で策定
①期待する子ども像
②期待する子ども像に関連がある「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」
③期待する子ども像に迫るために大切にしたいこと

「実践記録」
園と小学校が共通の視点を理解したうえで、実践し、子どもの学びの姿を描き出す。



【研究２年目】

〇作成した「架け橋期カリキュラム」を「協同」で改善
→複数園の教育課程を一つにすることで園と小学校の教育課程のつながりを意識



① 各園の教育課程を見比べ、共通する活動を切り抜き、配置・整理

「活動の言葉は違うけど、やっていることは、どの園も一緒ですね」

② ５領域で整理

「活動がバラバラでわかりにくい」
「付箋で、５領域がわかるように、色分けしたらどう？」

③ 行事の位置付けを再考

「この活動（５領域内のもの）が、行事につながる」

④ 小学校とのつながりを考える

「この活動、小学校の活動とつながりそう」
「今の描き方はつながらない、小学校も変えたい」

架け橋期のカリキュラム

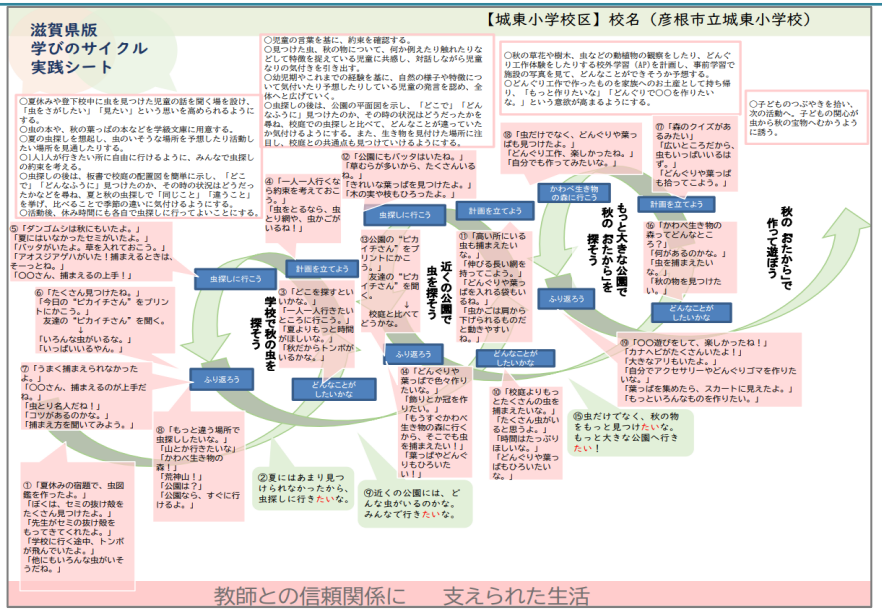
視点	留意事項
架け橋期のカリキュラムの実践	・研究２年目は、研究１年目の「実践記録」をもとに、保育・授業をデザインし、実践し、振り返るというＡＡＲサイクルをより促進させるために、「滋賀県版学びのサイクルデザインシート」（通称：ぐるぐるシート）を開発した。 ・本シートを活用し、モデル校区だけでなく、県独自幼保小接続事業「学びに向かう力推進事業」指定校区と共に子供主体の保育・授業を目指した。 ・子供主体の保育・授業を目指し園校が「協働」で取り組んだ。また、夏季休業中に「ぐるぐるシート」を使用し、施設類型の違う先生で保育案・指導案検討を行った。

【研究１年目】
○「架け橋期カリキュラム」実践記録の活用
実践後の振り返りを重視

【研究２年目】
○「滋賀県版学びのサイクルデザインシート」
（通称：ぐるぐるシート）の開発
子供を主体にした保育・授業をデザイン、
実践、振り返りの充実（AARサイクルを促進）

ＡＡＲサイクルで保育・授業改善

子供の学びは、日々の遊びや活動の中で、子供が心を動かし、主体的に遊びを繰り返し、充実感・満足感を味わい、また心を動かすという学びが展開していくことを通して、繋がり深まっていくものである。子供の想いや活動がどのように展開していくのか予想することで、子供を主体にした保育・授業実践に資することができるよう、本シートを活用いただき保育・授業の手掛かりとしていただいている。



【ぐるぐるシートを使った先生方の声】
・これはとてもよい。子供の思考の流れがとてもわかりやすい。
・視覚的に誰が見てもわかりやすい。他の先生と子供の様子を共有できる。
・保育案の代わりに活用しているが、保育案を書くよりもよい。
・子供の気持ちを考えながら吹き出しを考えるのがおもしろい。
・予想した姿がでてきたら「やった！」と思う。
・担任が子供の発達や成長に気付くことで、環境構成する力に変化が見られた。

子供主体の保育・授業を目指し校園が「協働」で取り組んだ。また、「ぐるぐるシート」を使用し、施設類型の違う先生で保育案・指導案検討を行った。

・４月「わくわくがいっぱい！」（公立小学校）　－小学校入学直後の取組の工夫、子供主体の学校探検－
・６月「道をつなげたい！」（公立幼稚園）　－子供の願いを支える保育者の援助－
・７月「自分で作った舟を浮かべてみよう！」（私立保育所）　－楽しさに共感しつつ物の使い方について考える－
・７月「水となかよし！」（公立保育園）　－０歳からの育ちと学びに応じた環境構成－
・10月「大縄に挑戦したい！」（公立幼稚園）　－友達と共に挑戦する姿を支える―
・11月「にんじんケーキをつくろう！」（私立こども園）　－子供の自主性を育む保育－
・11月「『１ねん４くみ のりものとしょかん』をひらこう〔国語科〕」（公立小学校）
－子供の興味・関心、目的に応じて学びを進める国語科の授業－
・11月「３くみわくわくかねだっこたいがおしらせします！〔国語科〕（公立小学校）
－子供の発想をもとにスタートする単元構想－
・11月「たのしい あき いっぱい！〔生活科〕」（公立小学校）（※上図参照）
－子供の“～たい”をつなげる単元構想－

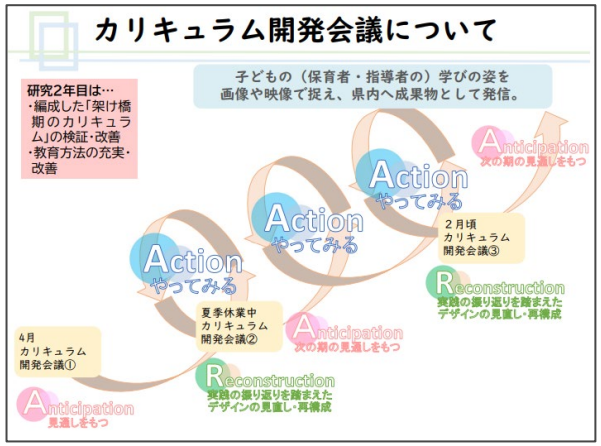
次年度への展望

視点	留意事項
成果と課題、及び展望	【成果】 ・持続的・発展的な幼保小接続のために、施設類型の違いによる校園の勤務体制やこれまでの取組状況を踏まえ、画一的に取り組みを進めるのではなく、状況に応じたそれぞれの一歩を進めることができた。その際、幼保小接続を推進するコーディネーターは指導とするという立場ではなく、施設類型の違いを「受容」し、伴走者として関わることが大切である。 ・「滋賀県版学びのサイクルデザインシート（通称：ぐるぐるシート）」を活用することで、保育・授業をデザインし、実践し、振り返るというAARサイクルが促進された。また子供を主体とした保育・授業実践に資することができ、その具体的な姿を収めた「幼保小架け橋実践事例DVD」を作成し、全県へ発信した。 【課題及び展望】 ・保育・授業が変わりつつあるが、子供の学びや育ちは、今後も継続してつないでいくことが大切である。そのために、校園の参考となる様々な実践を蓄積する。 ・校園によっては、一人、５歳児、１年生の担任の取組にとどまっており、組織が変わると幼保小接続が途切れたり停滞したりする可能性がある。そのため、令和６年度は、持続的・発展的なサイクルが定着する体制や方策を検討し、自校園全体で取組を進める。さらに、“みんなで”“一体的に”架け橋プログラム事業を展開するために、モデ研修の充実を図るとともに、地域・家庭へ発信する。

【研究２年目】
○持続可能な幼保小接続の体制づくり

・カリキュラム開発会議は、実践をよりよくしていくための振り返りや見通しをもつための場として機能させる。
・保育案・指導案は自校園で検討することを基本とし、その様式については問わない。

【コーディネーターの関わり方】
・指導するという立場ではなく、施設類型の違いを「受容」し、校園とともに伴走し支える立場で関わる。
・保育・授業における子供の学びの姿や校園の取組について発信し、よさをつなぐ役割を担う。



カリキュラム開発会議の位置付け

【研究２年目】
○幼児期の学びを児童期につなぐ保育・授業のポイント

【子供の主体的な学びのサイクルを意識】
・幼児の学びは、日々の遊びや活動の中で子供が心を動かし、主体的に遊びを繰り返し充実感・満足感を味わい、また心を動かすという学びが展開していく ことを通して繋がり深まっていくものである。「子供の主体的な学びのプロセス」を幼児教育も小学校教育も意識しつなぐ。
・小学校においては、教科等の見方・考え方を踏まえその教科等における資質・能力を身に付けられるような単元を構想する。そのために、指導者は、その資質・能力を発揮している具体的な子供の姿について検討することが重要。
・画一的な一斉指導を行うのではなく、児童の興味・関心に即して、例えば、紹介したい乗り物を選ぶ、好きな場面を見付けるなど、自分の課題や目的をもち主体的に学習に向かえるようにする。また、児童のタイミングで交流したり交流相手を選んだりするなど、学ぶ進度や必要感に応じて学びを進めることができるよう配慮することも求められる。

学びのプロセスをつなぎ自覚的な学びへ

【人・もの・こととの関わり】
・幼児は、主体的に身近な人・もの・ことなどあらゆる環境に直接関わりながら総合的に学ぶ。小学校においても、児童の発想や思いを生かし、適宜、関連する教材を取り上げて指導したり、教科書の内容を目の前の児童の実態に合わせてアレンジしたりすることが求められる。

令和６年３月に、子供の学びの姿や先生方の姿を収めた「学びをつなぐ幼保小架け橋実践事例DVD－架け橋期のカリキュラムをもとに実践しよう－」を県内へ発信した。

令和５年度成果物　幼保小架け橋実践事例DVD